

ペピ1世ピラミッドの建設労働者組織に関する一考察

山田 綾 乃

1. はじめに

ピラミッドにはじまる古代エジプト古王国時代の大規模建築には、高い技術力はもちろん、その造営に従事した膨大な労働力を組織的に管理・運営する体制が不可欠であった。ピラミッド建設を通して国家的組織（官僚組織）が整備された結果、強固な中央集権力を持つ統一国家が創造された（高宮 2006: 178）と評価されるほど、組織とその統制は中央集権的国家を成すうえで重要な課題の一つである。建築作業に従事した労働者の組織という点に目を向けると、とりわけ古王国時代⁽¹⁾のピラミッド造営に携わった労働者は、グループを形成し、階層的に組織化されていたとされている。さらに、その組織形態は古王国時代第5王朝中ごろを画期に変容していくことも徐々に明らかになっている（山田 2014a）。

本稿では、その変容を定義する重要な指標である高官名および称号が記された石材が多数出土した、第6王朝第2代の王・ペピ1世のピラミッドに着目する。資料上・報告上の諸問題により当該資料を含め、変容後の具体的な組織編成について発掘報告以外で議論されることはほとんどなかったが、本稿をもって当該遺跡建設における労働者組織の階層性や管理・運営について考察したい。

2. 建造墨書と労働者組織

2-1. 建造墨書とは

古代エジプトでは、ピラミッドをはじめあらゆる石造建造物において、具体的な建築方法を指示書や指南本、設計図などで伝達・記録する習慣を持っていなかった。ただし実際の建設作業を遂行する上では各工程の作業状況や、情報の指示・伝達を目的としたやりとりを文字または記号を用いて行っており、その断片的な記録が残されている。これが本稿で扱う主要資料・建造墨書である。欧文でMason's mark や Builder's inscription (Vymazarová et al. 2011) 等、和文では「石工マーク」「組立マーク」（近藤 2005: 152）や「グラフィート」（西坂他 2011: 22）と称されるこれらの文字資料を、本稿では「建造物の造営工程において建材に直接記されたまたは彫られた建設作業に関する書き付け」（山田 2014b: 67）と定義し、「建造墨書」（吉村他 1996）の呼称を用い

る。建造墨書に用いられる文字・記号類の表記法は、古代エジプトで一般的に用いられるヒエログリフ、ヒエラティック、筆記体ヒエログリフ (cursive hieroglyph) のいずれとも類似点をもつ。一方で、恒久性や審美性を必要としない non-textual (Haring 2009: 8) な資料であるという特徴を併せ持つ。建造墨書の9割以上は石材に筆等を用いて直接文字・記号を記すもので、多くの場合黒・赤・黄 (または黄土色) の顔料が使用される。

尚、建造墨書は古王国時代から中王国、新王国、プトレマイオス朝時代まで、全時代を通して知られている (吉村他 1996: 191)。採石から運搬、加工を経て石材が設置されるまでの間に繰り返し記されるとされ、その内容は1. 建設指示文および指示記号、2. 建設労働者組織名・記号、3. 日付などが中心である (cf. Arnold 1990: 20-21)。

2-2. 建造墨書によるピラミッド建設に従事する労働者組織の研究現状

建造墨書は、古王国時代の建設労働者とその組織の研究において最も重要な資料の一つである。現在では、石造建造物の造営、とりわけ大ピラミッドが造営された第4王朝期を中心に、ピラミッド建設時の労働者組織が判明しつつある。基本的な枠組みは、輪番制神官制度 (Phyle-system)⁽²⁾ と呼ばれる古代エジプト独特の行政組織システムに類似する。数十人から数百人程度の規模の労働者集団が、一定のサイクルで輪番制で任に当たる仕組みである。ピラミッド建設の場合はさらに莫大な労働量を管理する必要があったために、それらをまとめた大規模な集団も組織された。結果的に、大・中・小の異なる規模 (人数) の労働者集団が階層的あるいは複合的な編成のもとで機能していたと考えられている (Roth 1991, Lehner 1997, cf. 山田 2014a; 2014b)。

しかしながら、近年急増した新資料の蓄積を受けて、改めて古王国時代全体を通して建造墨書の組成変化を追うと、従来研究との様々な齟齬が浮上した。中でも最大の論点はピラミッド建設を支える労働者組織編成が古王国時代の全時期を通じて、先のような輪番制神官制度を援用した大・中・小規模の労働者集団からなる階層的な形態であったかどうかという点である。実際、一口にピラミッド建設といっても従事した労働者組織の構造は各々異なっており、既往研究を見直す必要性が指摘され始めている (Verner 2008, 山田 2014a; 2014b)。とりわけ第5王朝半ば、サフラー王治世以降に、それまで労働者の集団名と思われる表象やその他の建設指示に関わる記号類で構成されていた建造墨書の中に、突如具体的な高官の個人名とその称号が記され始める。さらにこの資料は時期を追うごとにその出現の頻度が徐々に増加する傾向にあり、注視すべき事象である。この特異的な資料の増加傾向については、建築工法の変化に伴ったものであるとの指摘や、当時の経済的諸問題によって誘発されたなど複数の要因が指摘されている (Verner 2003; Andrásy 2008)。さらに同時期に政治・社会・経済の多方面で発生する変化との同調性との関連を喚起する見解もある (Bárta 2013; 山田 2014b)。また建造墨書に表された高官の役柄は、建設作業に従事した者であるという解釈の他に、建築資材を寄進した人物であるとの新たな解釈も提示されている (Vymazarová 2013; 2014)。

2-3. 本研究の視座

建造墨書に高官名と称号が登場する背景については、先述のように複数の要因が指摘されている。しかし、これらの資料を有する多くの遺跡は現在も発掘継続中である場合、または発掘報告書が未刊行である場合が多い。従って、各報告書で言及される以外に各々の見解を相互に比較・検証することが難しく、まだ議論が成熟するまでには時間を要するだろう。

よって現段階で行うべきは、まず一遺跡に限って、丁寧に資料を解体し、高官名と称号を精査し、当時の建設作業と高官との関係性を明らかにすることと考える。各遺跡でこうした分析と検討を積み重ね、様々な労働者組織パターンの仮説が出揃ったところで、高官名が記された背景や要因を多角的に論じる次の段階へと移っていくべきであろう。そこで本研究では、この課題に最適な資料として、古王国時代第6王朝第2代ペピ1世のピラミッド出土の建造墨書を扱った1996年と98年の二稿にわたる概報を取り上げる (Dobrev 1996; 1998)。それらの概報を改めてまとめ直し、まず本遺跡資料の性格を紐解くところから始める。称号等を参考に階級や建設現場における役割を考察し、まとめとして第5王朝半ば以降の建設労働者の組織構造について予察を与えたい。

3. ペピ1世ピラミッド出土資料について

3-1. 概要

現在の南サッカラに位置するペピ1世ピラミッドには、約900個の石材に1,600点以上の建造墨書が残されていると報告されている (Dobrev 1998: 151)。これほどの出土点数は、おそらく古王国時代のコーパスの中でも最大量を誇ると見られる (図1)。しかしながら、図面上の記載のみで、現段階で詳細が公表されているのは計142点⁽³⁾のみである。また142点のうち13点は本稿の対象資料である役人名および称号とは異なるカテゴリに属する (Dobrev 1994)。さらに、建造墨書のトレース図は残る129点中59点のみが公開されている (Dobrev 1996: Figs.1-32; 1998: Figs.1-27)。

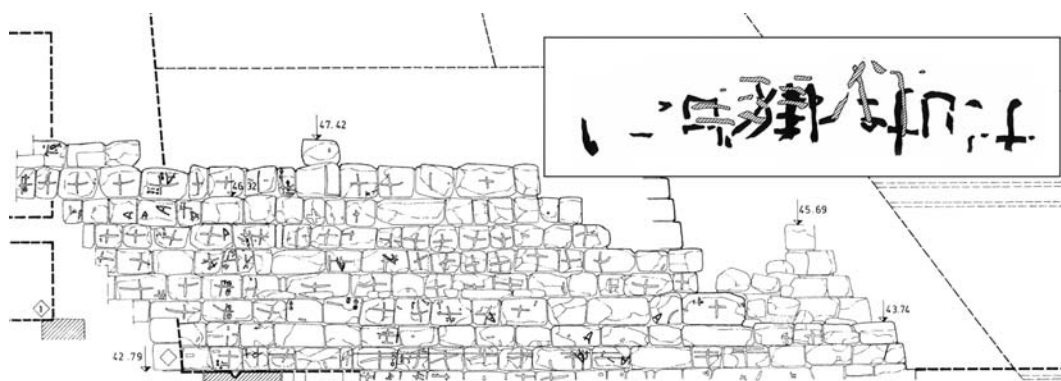


図1 ペピ1世ピラミッド東側立面図 (Labrousse 2012 Fig.11) および高官名と称号が記された建造墨書 (右上) (Dobrev 1996 Fig.18)

129点の資料を二稿の概報にわたって報告したドブレフ (Dobrev, V.) は所有称号をもとに主要な称号4つとその他、さらに名前だけの記載の6つのカテゴリを設けた (Dobrev 1996: 104; 1998: 159) (表1)。また図版掲載を行った59点の資料に関しては出土位置 (遺構、方位、面、段)、建材の種類についても言及している (表2)。建造墨書の書記法の特徴、すなわちパレオグラフィについても各カテゴリで扱っており、異体字や変体字に関する情報も書き添えている。しばしば記された文字と顔料との相関についても着目しており、より多角的に本資料を分析する視点が盛り込まれている。これらの丁寧な作業を評価し、本稿ではドブレフによる建造墨書の判読を踏襲する形で論を進めていく。

表1 ペピ1世ピラミッド出土の建造墨書内容一覧

カテゴリ	名前	その他の称号	出土資料数					計	出典		
			黒	赤	黒+赤	黄	灰		文献：ページ	図版(Fig.)	写真(Photo)
A 宰相 <i>tjij z3b tj</i>	1	Zpw	<i>hrj-tp nswt</i> <i>z3-ε nswt [hft-hr][gs]r sy</i>	12	1			13	Dobrev1996: 105-6	1-7	3, 5
	2	Htp	<i>z3-ε nswt hft-hrgs r sy</i>	2	1			3	Dobrev1996: 106-7	8-10	6
	3	Nfr-Pth	<i>jmy-r(3) snw.ty</i>	1	4			5	Dobrev1998: 152	1	
B 王の息子 <i>z3 nswt</i>	1	Tj- <i>n</i> h	<i>z3 nswt smsw?</i> <i>tz(w) nhn?</i>		5			5	Dobrev1996: 107-9	11-13	7, 8
	2	Pn-mdw	<i>z3 nswt smsw?</i>		1			1	Dobrev1996: 109	14	
	3	Jr-n.s?		2				2	Dobrev1996: 109-10	15	
	4	Hht (y) / Hht (y) ...	<i>z3 nswt smsw</i>	1	3			4	Dobrev1998: 153	2	
	5	Nb(.wy)-nh(.wy)-hr-h(w)=f	<i>z3 nswt</i> <i>hht(y)-ε</i>		2			2	Dobrev1998: 153-4	3-4	
	6	Tjij	<i>z3 nswt</i> <i>n jr=f</i>		1			1	Dobrev1998: 154	5	
C 王の執事 <i>hrj-tp nswt</i>	1	Jntj	<i>mdh qd nswt m pr.wy.</i>	12	2	2		16	Dobrev1996: 110-1	16-19	9
									Dobrev1998: 154-5	6	
	2	Hwj-n-Hnmw			1			1	Dobrev1996: 111	20	
									Dobrev1998: 155	7-8	
	3	Wn...?				1		1	Dobrev1996: 111	21	
	4	Zpw						0			
5	K(3)-pr	<i>jmy-r(3) gs-pr</i>	3	1			4	Dobrev1998: 155-6	9		
6	Mm / Mm[?]	<i>jmy-[r(3)] gs-[pr]</i>	6	3			9	Dobrev1998: 156	10		
D 廷臣 <i>smr w3tj</i>	1	Nj-k3w-jzj		2	3			5	Dobrev1996: 112	22-23	10
	2	Nfr-s3m-Pth		1				1	Dobrev1996: 112-3	24	
	3	Zj		1				1	Dobrev1996: 113	25	
	4	Mr...		1				1	Dobrev1996: 113	26	
	5	Htp	<i>jmy-[r(3)] pr ε?</i> <i>shd...</i>			1		1	Dobrev1996: 113-4	27	11
	6	jmbj			1			1	Dobrev1996: 114	28	
	7	Tpj?		1				1	Dobrev1996: 114	29	
	8	Hnt(y)-k(3)	<i>jmy-r(3) pr ε?</i>		2			2	Dobrev1998: 157	11	
	9	Ddj	<i>jmy-r(3) pr [ε?]</i>				1	1	Dobrev1998: 158	12	
E その他のタイトル	1	Hzzj-3h	<i>shd pr ε?</i>	1				1	Dobrev1996: 115	30	
	2	Pth-[h]tp-špsw?	<i>jmy jr.ty</i>		1			1	Dobrev1996: 115	31	
	3	εnh-jr-Pth	<i>jmy wr.t m hr(y).t-hrw</i>		1			1	Dobrev1996: 116	32	
									Dobrev1998: 158	13	
	4	Mrj	<i>hnt(y)-ε</i>	3	3		3	9	Dobrev1998: 159	14	
5	Nfr-hw=w	<i>jmy-r(3) mε</i>	3	5			8	Dobrev1998: 159	15		
F 名前のみ	1	Zpw		1				1	Dobrev1998: 159	16	
	2	Jntj		1				1	Dobrev1998: 159	17	
	3	Hnt(y)-k(3)			1			1	Dobrev1998: 159	18	
	4	Hnt(y).t-k(3)			1		1	2	Dobrev1998: 160	19	
	5	Jr-js		1	1			2	Dobrev1998: 160	20	
	6	Mrj-εh-εnh		1	1		2	4	Dobrev1998: 160	21	
	7	Nfr-wm=s.t			3			3	Dobrev1998: 160	22	
	8	N-psš			3			3	Dobrev1998: 160	23	
	9	Hnmw-ntj		1	2		1	4	Dobrev1998: 160	24	
	10	Hnt(y)-Nhb-sbh			1			1	Dobrev1998: 161	25	
	11	Qdw			3			3	Dobrev1998: 161	26	
	12	K3		1	2			3	Dobrev1998: 161	27	
合計点数							129				

表2 建造墨書出土コンテクスト一覧

Dobrev vol./fig.	Cat.No.	出土コンテクスト						備考		
		遺構	方位	面	段	種類	状態			
96/1	A	1	pyramid	south		6	backing	in situ		
96/2		1	wall	south		3	backing	in situ		
96/3		1	wall	south	south	3	coating	in situ		
96/4		1	wall	south	south	2	coating	in situ		
96/5		1	pyramid	south		12	core(1)	in situ		
96/6		1	pyramid	south			backing			
96/7		1	pyramid	south		6	backing	in situ		
96/8		2	wall	south			backing		opposite of Fig.9	
96/9		2	wall	south			backing		opposite of Fig.8	
96/10		2	wall	south	north	2	coating	in situ		
98/1	3	pyramid	west		x + 3	core(1)	in situ			
96/11	B	1	pyramid	west		x + 2	core(1)	in situ		
96/12		1	wall	south	south	1	backing	in situ		
96/13		1	wall	south	south	2	backing	in situ		
96/14		2	pyramid	north		7	backing ?	in situ		
96/15		3	pyramid	south		9	core(1)	in situ		
98/2		4	pyramid	west		9	backing	in situ		
98/3		5	pyramid	west		x + 2	backing	in situ		
98/4		5	pyramid	west		10	backing	in situ		
98/5		6	pyramid	west		8	backing	in situ		
96/16		1	pyramid	south-west corner			backing			
96/17	1	pyramid	south			backing				
96/18	1	pyramid	south			backing				
96/19	1	pyramid	west		4	backing		Dobrev1998にて 出土位置を再確認		
98/6	1	pyramid	west		4	backing				
96/20	C	2	pyramid	north		2	filling			
98/7		2	pyramid	west		5	filling		next to Fig.28	
98/8		2	pyramid	west		5	filling		next to Fig.27	
96/21		3	pyramid	west		x + 5	core(1)	in situ		
98/9		5	pyramid	west		5	backing	in situ		
98/10		6	wall	south		1	backing	in situ		
96/22		1	pyramid	west		x + 4	core(1)	in situ		
96/23		1	wall	south	south	2	backing	in situ		
96/24		2	pyramid / wall	south			backing			
96/25		3	pyramid	south		7	core(1)	in situ		
96/26	D	4	pyramid	south		6	core(1)	in situ		
96/27		5	pyramid	west		x + 1	core(1)	in situ		
96/28		6	pyramid	west		x + 5	core(1)	in situ		
96/29		7	pyramid	north		2	backing	in situ		
98/11		8	pyramid	west		x + 3	core(1)	in situ		
98/12		9	pyramid	west		6	filling	in situ		
96/30		E	1	pyramid	south		5	backing	in situ	
96/31			2	pyramid	west		5	core(1)	in situ	
96/32			3	pyramid	east		8	backing	in situ	
98/13			3	pyramid	west		3	backing		
98/14	4		pyramid	west		6	backing	in situ		
98/15	5		pyramid	west		1	backing	in situ		
98/16	1		pyramid	south						
98/17	2		pyramid	west						
98/18	3		pyramid	west		x + 3	core(1)	in situ		
98/19	4		pyramid	north		1	backing	in situ		
98/20	5	wall	south		2	backing	in situ			
98/21	F	6	pyramid	east						
98/22		7	pyramid	west		x + 6	core(1)	in situ		
98/23		8	wall	south		2	backing	in situ		
98/24		9	pyramid	west		2	backing	in situ		
98/25		10	pyramid	north		4	filling	in situ		
98/26		11	pyramid	south		1	backing	in situ		
98/27		12	pyramid	west		3	backing	in situ		

3-2. 建造墨書の特徴

ここでは、ドブレフによる建築墨書の判読の再検討を行った過程で看取された資料的特徴についてまとめる。

まず、ほとんどの建造墨書が石材のある一面に収まるように記されていることが分かった。文字の欠損の有無はその建造墨書が記された工程の議論において重要である。本資料を含む古王国時代の建造墨書の場合、中王国時代の例のように採石や運搬の日付や指示が具体的に併記される例が無い（cf. Arnord 1991: 66-89: W1-60）、建造墨書が石材の採石から運搬、加工、設置のうちのどのタイミングにおける建造墨書であるかを特定することは本来極めて難しい。ただし概ねすべての文字列が残存している（文字が欠損している例が少ない）本資料は、石材がある程度の形に整形されたのちに記されたと推察することができる⁽⁴⁾。これらがある程度石材が整形された段階、あるいはその後の作業工程の中で記された墨書であるとする、本資料に表わされた名前や称号を持つ高官の多くは、採石・運搬・加工を経た後の、極めてピラミッド建設の現場に近い段階での作業との関わりを示唆させる。

また本資料に登場する称号は、実務を直接示すとは限らない「名誉称号」（本研究では「王の執事 *hry-tp nswt*」および「廷臣 *smr w'tj*」が該当する）と、実務を示すその他の称号の両方で構成されている。本研究では建造墨書に表された高官名が果たした役割を考察することを目的としているが、「名誉称号」のみを記した高官の役職は字面からは判断できない。従って、これらの資料を如何に解釈するかが労働者組織を紐解く際に最も重要かつ問題となるだろう。さらに称号のバリエーションという点にも特徴が見られた。対象資料には、宰相から監督官、その他の王家周辺の役人に至る様々な階層が含まれている。この点は第5王朝期の類例との大きな相違点である。前時期に年代付けられる高官名を記した建造墨書はそもそも一遺跡に数例と限られており、称号を併記しない場合も少なくない。称号を併記している例はピラミッドではなく、マスタバ墓からの出土例に多く（Verner 1992, Krejčí 2009, Vymazarová 2014）、ピラミッドの場合は所有者の親族である王妃または王の息子の名前が記された資料が主である（cf. Verner 1992, Krejčí 2008）。

以上のことから、ペピ1世ピラミッドの資料例は既存の古王国時代に年代付けられる建造物出土の資料の中でも極めて異質で、新しいジャンルと言える。建造墨書に高官名が登場する以前の時代については、先述した輪番制神官制度を参考に労働者組織の集団名だけからその階層性や作業内容を推し量っていたが、本資料は既知の労働者集団同士の階層性以上に複雑な現場作業とその組織像を想像させる。同時にこの時代において多種多様な高官名が登場する背景は、それ以前と全く異なる労働者組織の運営体制をうかがわせる。

4. 出土称号に関する諸検討

本章では、先に整理された特徴を受けて、称号の内容に当時の建設作業の管理・統制を復元す

る糸口があるのではないかとにらみ、ペピ1世ピラミッドの建造墨書に表わされた称号と、それを所有する人物の背景について考察する。本稿では殊に建設作業との関連がうかがえる称号を抽出し、ペピ1世ピラミッドの建設における具体的な職責や役割、互いの指揮系統について検討を加えたい。

4-1. 宰相 *t3yty z3b 3ty*

宰相という役職は当該期における行政最高位にあたり、相当な権力と実力を兼ね備えていたと想像できる。実際に宰相称号をもつ人物の墓は、カゲムニ (*K3i-gmni*) やメレルカ (*Mrrw- K3i*) に代表されるように堅固かつ壁面装飾等も豊かな造りで、ピラミッドに隣接するネクロポリスに位置している場合が多く見受けられる (von Bissing 1905; 1911, Firth and Gunn 1926)。この称号を所有する古王国時代の人物は同時に多くの称号を併有しており、「労働の監督官 *imy-r(3) k3.t*」といった建設を含む労働に関すると思われる称号も見られる (Strudwick 1985: Table 29)。本遺跡における宰相称号を含む建造墨書の出土点数は計21点であり、単純に点数を比較した場合、「王の執事 *hry-tp nswt*」に次いで多い。また高官個人で考えた場合、セチュウは「二つの家における王の建築家 *mdh qd nswt m pr.wy*」の称号を持つインティに次ぐ13点を数える。したがって宰相称号の出土割合は高く、宰相と現場作業との強い関連性がうかがわせる。

では宰相が名を記す行為は何を目的としたものだろうか。繰り返しになるが、宰相の称号や名前が建造墨書に記された例はこのペピ1世ピラミッド以外には知られていない。行政についての最高責任者であるだけでなく、建築活動についても宰相が多大な監督責任を負っていたと想像できる。そのような最高責任者としての立場と、石材に収まるように記された建造墨書の状況を鑑みると、宰相の称号と名前による建造墨書は、建設作業の遂行状況を確認した一種のサインように考えられる。

4-2. 王の息子 *z3 nswt*

「王の息子」の称号を所有している人物については既に多く明らかにされているのだが、ペピ1世ピラミッド出土資料のうち、ペン・メドゥ *Pn-mdw* とネブアंक・ケルクエフ *Nb(.wy)-3nh(.wy)-hr-h(w)=f* は *Die Ägyptischen Personennamen* シリーズ (Ranke 1935; 1949; 1977) にも、*Topographical bibliography of ancient Egyptian hieroglyphic texts, reliefs, and paintings* (Porter and Moss 1978) にも記載がない。

ペピ1世ピラミッドから出土した「王の息子」の称号を持つ人物に共通する事項として、「王の息子 *z3 nswt*」、「王の息子の年長者 (長男) *z3 nswt smsw*」以外の称号をほとんど併記しないことが挙げられる。本資料では5名の王の息子の名前が判明しているが、彼らは監督官などの役職を併記しておらず、そのためピラミッド建設への関わり方は判然としない。つまり、建造墨書を解読するだけでは、「王の息子」の名前が建材に記される意味は判断出来ない。しかしこの「王

の息子」という称号に関する時代的な流れを見てみると、彼らの名が建造墨書に記された理由が明瞭となった。

古代エジプトではしばしば称号の意味が本来の内容から乖離したり形骸化したりすることがある。「王の息子」という称号の場合は第5王朝末以降に、その意味合いが変化することが分かっている。この時期になると、血縁上の「王の息子」ではなくとも「王の息子」という称号を所有する人物は存在し、彼らは宰相や建設・遠征のリーダーの職に就くようになるのである (Helck et al.1980: 627-628)。この称号の意味合いの変化は大変に重要である。

つまり、ペピ1世ピラミッドの建造墨書に表された「王の息子」の称号を所有する人物らは、血縁上の「王の息子」とは異なり、本遺跡の建設作業のリーダーとして従事していた可能性が浮上するのである⁽⁵⁾。本遺跡における同資料は6名の「王の息子」に言及しており、それぞれの資料点数は5点以下である。うち8点は原位置出土であることもわかっている。それらの出土位置はピラミッドの7~10段、あるいは南側回廊壁と比較的集中している。これを考慮すると、「王の息子」の称号を所有する人物は、各々が建設作業において常勤していたのではなく、「王の息子」という称号を持つ人物らが輪番性等で、交代で定期的に作業を監督するような体制を執っていたのではないだろうか。

4-3. 二つの家における王の建築家 *mdh qd nswt m pr.wy*

本遺跡資料では、インティ *Inty* という人物のみが持つ称号である。その他の称号については複数の人物が所有することが一般的である一方で、こうした特徴はインティと建設活動との結びつきにより一層重要性を与える。「二つの家における王の建築家 *mdh qd nswt m pr.wy*」という称号は、文字通り建築活動との関わりを直接示しており、本遺跡においてはピラミッド建設と極めて密接に関連している。さらに報告者ドブレフによれば称号の中の「二つの家 *pr.wy*」は、上下エジプトの双方で建築活動の責任を負っていたことを意味しているという (Dobrev 1996: 110)。すなわちこの人物が担った役割は、ペピ1世のピラミッド建設だけでなく、当時の古代エジプトの国家運営においても重要であったことは間違いない。

この人物についての見立てとして、ドブレフは2つの仮説を述べている (Dobrev 1996: 110-1)。一つはペピ1世の妃イネネク *Innk* の愛称がインティであることから、彼女に建設の委託をしたのではないかという説である。もう一つは、インティはペピ1世葬祭殿の建築家の名前またはその愛称ではないかという説である。彼は前者を本文中で、後者を註で示しているが、後者について同一の称号を持つ人物を例示するなどやや高い関心を持っているように感じられる。

類例としてその他のピラミッド複合体出土の建造墨書にあたった場合、ケントカウエス2世⁽⁶⁾の名前がアブ・シール・ネクロポリスの複数のピラミッドから発見されていることを除いて (Verner 1995, Verner et al. 2006, Krejčí 2008)、王妃または王女の名前が記される事例はみられない。

さらに、ケントカウエス2世の名前とともに建設作業に関わる称号などが併記される例は一例もない。確かにペピ1世の妃イネネクの愛称はインティであるが (Leclan and Clerc 1995: pl.XX: Fig.29)、類例を参照する限りドブレフの前者の説はやや突飛であると言わざるを得ない。

一方で、建築家の愛称ではないかという指摘の妥当性はいかなるものだろうか。ジョーンズ (Jones, D) による集成では、ペピ1世治世下で本職「二つの家における王の建築家 *mdh qd nswt m pr.wy*」を務めた人物は2、3名に限られている (Jones 2000: 464-5)。しかし、いずれの人物もインティという名前・愛称は持ち合わせていない。

ペピ1世以前で考えてみると、ギザに大規模なマスタバ墓 (G2370) を造営したセネジェム・イブ *šenedem-ib* という人物がインティという愛称を持っていることが知られている (Reisner 1942: 264: Fig.162)⁽⁷⁾。彼の一家は建築家業であり、その息子らも同じ称号を所有しており、同一のマスタバ墓に新たにシャフトを造営したり、周辺の場合に墓を築いている (Reisner 1942: 167-8, 226: Fig.165)。尚、セネジェム・イブは同時に宰相称号を併有しており、その社会的背景は単に「二つの家における王の建築家 *mdh qd nswt m pr.wy*」の称号を所有していただけの人物以上に高位にあったと想定される。

よって、「二つの家における王の建築家 *mdh qd nswt m pr.wy*」という職はペピ1世以前の時代 (セネジェム・イブの場合は第5王朝末) では宰相が兼務することもある役職であり、国家の中核に近い要職であったと考えられる。一方、本遺跡では、宰相称号とほぼ同じ出土点数であることを考えると、第6王朝ペピ1世治世期には宰相との兼務はなく、もはや完全に分業されていた可能性が高いだろう。また宰相の名前は複数名判明しているが、建築家はインティ一人である。以上のことから、あらゆる国家運営を担う宰相に代わって、建築家の称号を持つ別の人物が建設現場に作業期間を通して常勤していた構図が想定される。

4-4. 隊舎の監督官 *imy-r(3) gs pr*

この称号を持つ者は、本遺跡からは2名判明している。いずれも名誉称号と言われる王の執事 *hry-tp nswt* の称号を併せ持つ (Strudwick 1985)。「隊舎の監督官」という訳語から、主に隊舎を管理する姿が創造される。しかし、建造墨書に名前が登場することを考慮すると、それぞれが受け持つ隊舎の成員はすなわち建設労働者たちを指し示す。それに留まらず、建設活動の現場においても監督官として部隊を指揮する立場にあった可能性はないだろうか。

4-5. 王の監督官/長 *imy-r(3) pr ʿ3*

この称号を持つ者はいずれも名誉称号「廷臣 *smr wʿty*」の称号を併有する人物である。再びジョーンズの集成によれば、この称号は古王国時代での類例が比較的少ないようである (Jones 2000: 116)。具体的な資料としてはハッサン (Hassan, S.) によるギザの一例しかない (Hassan

1960: 27)。

imy-r(3)-pr ʿは「王の監督官」を意味しているが、建材の採石から加工、設置に至るまでの過程で記されるという建造墨書は性格との共通点が見出せない。類例が少ないことから判読について原資料を確認しなければならないが、この称号が建造墨書に記されている場合の視点というのが今後必要になってくるだろう。

4-6. 監督官／監察官 *shd*

ペピ1世ピラミッドでは、先の*imy-r(3) pr* ʿの称号と併有される場合もある称号で、称号自体は複数の類例が知られている (Jones 2000: 910)。しかし、建設現場との関わりに関してはもちろん、*shd* = inspectorの社会的地位についてもほとんど明らかにされていない。パール (Baer, K.) による称号の階層分けの研究によれば、本遺跡で確認されている称号の中でも比較的低い身分に分類される (Baer 1960)。

4-7. 船長／キャプテン *imy irty*

通常船長あるいは船のキャプテンを意味する *imy irty w3* として知られている称号の一部、または省略形と考えられる (Jones 2000: 47)。建設作業と船との関連は深く、建設労働者の組織記号に用いられているものには船舶用語に由来する文字が存在する (cf. Roth 1991)。そうした慣例から、この称号も船舶用語が転じたものである可能性が高い。一方、この称号の意味 (役職の実態) については、「建造作業の監督官」や「労働者の指導者」との訳語の方が適当であるとの提案もある (Dobrev 1996: 115)。これらの意見を資料自体に立ち返って考えてみよう。

ピラミッドの建設工程に照らし合わせて考えた場合、船が関わるタイミングは、対岸 (東岸) にある採石場からナイル川を渡って建設現場の港 (西岸) に石材を運搬する工程に該当する⁽⁸⁾。この運搬作業に関わる類例としては、中王国時代の建造墨書に石材を船で運搬した日付と責任者の名前を記した例がある (Arnold 1990: 130: Fig.E 1.3)。しかしこのときは称号が併記されていない。代わって「船長／キャプテン *imy irty*」という称号は一旦西岸の建設現場周辺に仮置きされた石材が河岸段丘上に引き揚げられた段階で登場する (Arnold 1990: 21)。この場合も「労働者の監督官 the overseer of the work」という訳語が当てられている (Arnold 1990: 25: 77-78: Fig. W27-28)。

実際ペピ1世ピラミッドの建造墨書を見ると、船長の称号と名前は石材に納まって記されているものの、石材の中央を避けやや端に寄っている。また同じ石材面に併記されている十字の記号とは筆の太さに差があり、さらにその上にこの称号と名前が重なっている。つまり、2つは異なる段階で記されており、かつこの称号と名前の前に少なくとも建造墨書を記す工程が一つは存在したといえる。

これらの類例と資料状況から判断して、「船長／キャプテン *imy irty*」という称号は、その他の建設労働者の組織記号と同様に船舶用語に由来する可能性はあるものの、建造墨書上ではもはや船との直接的な関係は薄いだらう。この称号を所有する高官については、石材が西岸に到着した後の作業を監督・指導した人物像が想定される。

4-8. 軍の監督官 *imy-r(3) mšꜥ*

この称号は一般に軍事的役職と考えられるものであるが、先項「船長／キャプテン *imy irty*」と同じく中王国時代の壁画資料に同一の称号を持った人物が建設作業に関わっている場面が描かれた例がある。それは採石場から石または彫像を運ぶ場面を描いており、necropolis-workerの集団を意味する場合にこの称号の一部に当たる *mšꜥ* を用いている (Kothay 2008: 142)。同じく、中王国時代第12王朝センウセレット1世のピラミッドには、いつどこからこの石材を運んできたか、日付(作業完了日?)とともに部隊長 *imy-r(3) mšꜥ* の称号を持つ人物の名が記された例がある (Arnold 1990: 68-69: Fig.W6: W8)。古王国時代ではこのような類例は知られていないが、ペピ1世ピラミッドでも中王国時代の例と同様に労働者集団の長にこの称号 (*imy-r(3) mšꜥ*) が与えられており、何らかの監督業務を行っていた可能性は十分に考えられるだろう。さらに中王国時代の類例がともに石材運搬に関わることを鑑みると、直接建設現場で職務に従事していたというよりも、建設現場に石材を供給する職務との繋がりが深いと判断される。

4-9. 南の王の文書の書記官 *zš-ꜥ nswt hft-hr gs rsy*

この称号は宰相のうちセチュウ *Zḥw* とヘテブ *Htp* が所有している称号で、「南の」というのは「南の地域」を指し示していると解釈されている。ただし類例がない特殊な称号であるため建築活動はおろかこの称号の本質的な役割については殆ど明らかになっていない。(Jones 2000: 841, Moreno Garcia 1999: 120)⁽⁹⁾。

4-10. 小結

以上のように、ペピ1世ピラミッド出土の建造墨書に表された称号について検討を加えた。称号のバリエーションは既に言及した通りだが、階層順に整理すると、宰相→建築家→そして各監督官・指導者へと指揮系統が下るように構成されていることが分かる。監督官・指導者の類では、王の息子の称号がより高位に当たると推定される。それぞれの構成人数も、3名の宰相職があり、以下の現場作業に関しては1名の建築家、6名の「王の息子」、そしてその他多数の監督官・指導者とピラミッド型の組織構造を呈している。宰相職と建築家の職は第6王朝のペピ1世治世では分業が進んでいたと見られる。他の監督官・指導者にも各々特徴が見受けられた。隊舎の監督官 *imy-r(3) gs pr*、王の監督官／長 *imy-r(3) pr ꜥ*、監督官／監察官 *shd* の3つの職種は、ピ

ラミッド建設の現場において職務に当たる一方で、船長／キャプテン *imy irty* は石材の仮置き場から建設現場へ石材を運び届ける職務、さらに部隊長 *imy-r(3) ms^c* は採石場から石材を運び出す場との関係が浮かび上がった。

5. 結論 —ペピ1世ピラミッド建設における労働者組織とは—

まずは本研究の主軸である高官名とその称号が表されるまでの流れを整理しよう。第5王朝半ばに建造墨書上から王名を冠した大規模な集団名が徐々に姿を消し、その下部組織としての中規模・小規模な労働者集団のはっきりとした階層性も表れなくなる。それと入れ替わるようにして、高官名と称号を建造墨書に記す新たな慣習が導入された。それ以前（第3・4王朝）では、様々な他分野のシステムや手法を援用・転用することで段階的に労働者組織が形作られてきたが、この時代に一つの転換点が訪れた（山田 in preparation）。

しかし第6王朝ペピ1世ピラミッドの建造墨書のように宰相や建築家、様々な監督官の名前と称号を記す慣習は他に類を見ないもので、一層独自性・特異性の高い新たな労働者組織の構造が存在していたと考えられる。その組織運営は王を頂点に、宰相、二つの家の王の建築家、「王の息子」、そして各監督官へと続く指揮系統を主軸としたものと想定される。また資料の欠損状況から、彼らは主にピラミッドが建てられる建設現場で作業に当たったと考えられる。ただし例外も含まれており、中王国時代の資料例とその解釈を参考に、建設現場に石材が到着する以前の工程を監督していた役職として船長／キャプテン *imy irty* と部隊長 *imy-r(3) ms^c* といった称号を持つ高官の存在も指摘した。

従来の建設労働者組織の議論では、建設現場で働く労働者組織だけに注目が置かれていた。しかし、ピラミッドの建設工程には採石技術、重い石材を運搬する技術、強固でありかつ均整の取れた内部構造を実現するための石材加工技術、そしてそれらを狂いなく設置する技術など、異なる一流の技術力が求められ、投入されたはずである。既往研究のような一元的で、建設現場で働く労働者中心の議論は、採石から運搬、加工、設置までを一括して請け負っていたように受け取られ、ピラミッド建設に求められる多種多様な技術体系や工程を全く考慮できていない⁽¹⁰⁾。それに対して、本研究ではペピ1世ピラミッド出土の建造墨書を再考察したことで、建設現場とそこに石材が運ばれる過程に関わった労働者の監督官の存在を見出した。

無論ペピ1世ピラミッドの建造墨書に表された高官たちだけが、建設作業に従事していたわけではない。ドブレフによれば、数百人・数千人規模を抱える大規模集団というものは、採石、運搬、石材の持ち上げなどの厳しい重労働を行い、一方数十人単位で構成される小規模な集団は精密で専門的な仕事を請け負っていたという（Dobrev 2003: 30）。では彼らの監督は誰が行ったのだろうか。第5王朝半ば以降の建造墨書において、大規模な労働者集団を表わす名前や表象が減少し、それに呼応するように高官名の出土点数が増加することは冒頭でも述べた。本研究の出

発点でもある。先のダブルフの解釈を借りれば、この徐々に建造墨書上から姿を消していく大規模集団が担っていた基本的な職務は建設現場での作業に分類される。対して本稿で取り上げたペピ1世ピラミッドでは、「王の息子」と様々な階層の監督官が建設現場での作業の監督に当たった。つまり、それ以前（特に第4王朝）で大規模な労働者集団が担っていた建設現場での作業は、各々の監督官が管理できるだけの労働者集団に改編され、個別の監督官による監督体制へと移行していったのではないだろうか。このように捉えれば、王の名前を冠した労働者集団名が姿を消す理由も説明することができる。

さらに建造墨書の意味自体について考えると、高位で且つ建設活動との関連をうかがわせる資料が多い。マスタバ墓の資料では王の建設作業に対し石材を寄進した者や、王の庇護に預かることを願って現世での特需に限らず来世での安定を願う儀礼的な意味が表されたものとの解釈 (Vymazarová 2014: 277-278)。しかし本稿で改めて内容を検討し、マスタバ墓で見られる高官及び称号の様相とは明らかに異なる。むしろ、石材の総点数を把握するため勘定を行う際に建造墨書を記したという新王国時代の事例との関連性の方が強く認められる (吉村他 1996: 192)。1,600点に上るペピ1世ピラミッド建造墨書の総点数に対し、本研究で扱った高官名と称号はその1割にも満たない。このような出土割合と、出土位置に規則性がなく散発的に現れる理由は、おそらくこれらの建造墨書を記す意味（目的）が、対外的に何かを示したり指示を与えるのではなく、石材総点数の勘定を含め現場作業が滞りなく進められていることを各工程や集団の監督官が定期的に確認した、その記録であるからではないだろうか。

では何故このような労働者組織が生まれ、ピラミッドの造営に当たることになったのであろうか。これはピラミッド建設を通して国家的組織（官僚組織）が整備されたことと大きく関わってくるだろう。第5王朝半ば以降、幾度の政治・経済的転換点が起こり、官僚組織との関係も幾度となく見直された (Strudwick 1985, Kanawati 1977, Bárta 2013)。その事実は近年の発掘調査によって直接的に証明されつつある (Bárta 2014)。官僚組織の変化は、建設活動における労働者組織とそれを動かす高官らについても大々的な改革・改編をもたらすだけの影響力を備えていたに違いない。王族だけの中央権力の維持は難しく、高官と手を携えての国家権力の維持が模索された時代に、もはやかつての王名を冠した労働者集団での国家的事業の完遂は困難だった可能性がある。建造墨書からは、ペピ1世ピラミッドの場合、そのような政権や行政機関の社会的背景を受けて、王がピラミッド造営についての意思を宰相に伝え、それを建築家が具現化するという体制が取られたと考えられる。さらに建設の実際の作業は高官が直接労働者の仕事を監督し、管理・統制する方法が選択された。中には輪番制等の従来の労働システムの援用も適宜用いられていただろう。

6. おわりに

冒頭でペピ1世ピラミッド出土の建造墨書は極めて特異的な資料であると説明したが、そこから浮かび上がった古王国時代第6王朝の建設現場の様子は、一般的に用いられる階層性を持った組織図 (Roth 1991: 119-143, Lehner 1997: 132) の中で語り尽くすことは出来ないものであった。従来、この時代の政治体制の変化は壁画資料に記された名前と称号を集成し、そのアセンブリッジや併有称号の組み合わせの変化から分析する方法が主軸であった (Bear 1960, Strudwick 1985, Kanawati 1977; 1980)。それらは古王国時代社会像や階層性を構築するまでの高い研究成果を上げているが、複数の称号を併有することが一般的な古代エジプトの行政組織においては実際の職務を特定できないという欠点もあった。建造墨書はこうした欠点を埋める一片として、建設活動に確実に従事していた証拠を提示できるだろう。本稿では、そのような視点から建造墨書に名を残した人物の実際の職務について考察を与えた。建造墨書に名を記した人物は、ピラミッド建設のある工程において、多くの場合監督官や長としてある程度の規模の集団を取りまとめている者であっただろう。さらに、建造墨書に名前と称号を記す行為には、作業の進捗状況を確認したというサインや自らが監督する労働者集団が行った作業についての責任を記すという意味合いがあったと考えられる。古王国時代資料には、具体的な作業内容を併記する事例は見られないが、日付とともに名前が記される例は中王国時代資料とよく類似している (cf. Arnold 1990)。おそらく同様の機能が与えられていたとみて問題ないだろう。

最後に、本稿でも繰り返し指摘した通り、ペピ1世ピラミッドの建造墨書の内容、とりわけこれほどの点数の高官名と称号の発見例は他に類がない。後代のペピ2世ピラミッド葬祭殿ではさらに様相が一変し、筆者はピラミッド建設の管理・統制のシステムが根本から異なっている可能性を指摘している (山田 2014b)。このように建造墨書の内容や特徴が各遺跡で異なることは、一見同じに見えるピラミッド建設が、各々のピラミッドのプランや工期、立地条件や使用する石材の選択、ピラミッドの内装などの諸条件、そしてその時々々の国家運営の諸事情に合わせて、その都度独自の作業工程が立案されていたことを傍証している。それに伴い労働者の組織形態やそこに携わる高官たちの構成も変化し、建造墨書はそれを物語る唯一の資料ということになる。今後本稿と同様の個別研究を蓄積することでそれぞれのピラミッド建設において、労働者の管理運営という視点でどれほどの差異があるか順に明らかにしていきたい。

謝辞

本稿は日本学術振興会特別研究員研究奨励費 (課題番号26・4648) の成果の一部である。執筆にあたっては早稲田大学文学学術院近藤二郎先生に御指導頂き、また早稲田大学エジプト学研究所の諸先輩方から常日頃より研究の膨らませるための多くの御助言を賜った。末筆ながら深い感

謝の意を申し上げる。

参考文献

- Abu Bakr, A. M. and Mustafa, A. Y. 1971 "The funerary boat of Khufu", in Ricke, H., *Beiträge zur ägyptischen Bauforschung und Altertumskunde*, Heft 12, pp.1-16, Cairo, Wiesbaden.
- Andrássy, P. 2008 "Builders' graffiti and administrative aspects of pyramid and temple building in Ancient Egypt", in R. Preys (ed.), *Structuring religion. Proceedings of the 7th Egyptological Tempeltagung, 28 Sept.-1 Oct. 2005 in Leuven, Königium, Staat und Gesellschaft früher Hochkulturen 3/2*, pp.1-16, Wiesbaden.
- Arnold, F. 1990 *The Control Notes and Team Mark*, The Metropolitan Museum of Art Egyptian Expedition, The South Cemeteries of Lisht, vol. II, New York.
- Baer, K. 1960 *Rank and title in the Old Kingdom: the structure of the Egyptian Administration in the Fifth and Six Dynasties*, Chicago.
- Bárta, M. 2013 "Egyptian kingship during the Old Kingdom" in Hill, J. A., Philip J., and Morales, A. J. (eds), *Experiencing power, generating authority: cosmos, politics, and the ideology of kingship in ancient Egypt and Mesopotamia*, pp.257-283. Philadelphia.
- Bárta, M. 2014 "Collapse hidden in success. Rise and Fall of the Old Kingdom", *Kmt, A modern Journal of Ancient Egypt* Vol.25 (1), pp.18-28, California.
- Dobrev, V. 1994 "Observations sur quelques marques de la pyramide de Pépi Ier", in (eds.) Berger, C., Clerc, G. and Grimal, N., *Hommages à Jean Leclant, Vol.1, Études Pharaoniques*, Bibliothèque d'étude 106/1, pp.147-158.
- Dobrev, V. 1996 "Les marques sur pierres de construction de la nécropole de Pépi Ier, Étude prosopographique", *Bulletin de l'Institut français d'archéologie orientale* 96, pp.103-142, Cairo.
- Dobrev, V. 1998 "Les marques de la pyramide de Pépi Ier, Notes complémentaires", *Bulletin de l'Institut français d'archéologie orientale* 98, pp.151-170, Cairo.
- Dobrev, V. 2003 "Administration of the Pyramid", in (ed.) Hawass Z., *The Treasures of the Pyramids*, Chapter 2, pp. 28-31, Torino.
- Firth, C. M. and Gunn, B. 1926 *Teti Pyramid Cemeteries*, I: Text, II: Plates, Excavation at Saqqara, Cairo.
- Gardiner, A. 1957 *Egyptian Grammar*, 3rd edition, Oxford.
- Haring, B. J. J. 2009 "Introduction" in (eds.) Haring, B.J.J. and Kaper, O.E. *Pictograms or Pseude Script?, Non-Textual Identity Marks in Practical Use in Ancient Egypt and Elsewhere*, pp.1-4, Leiden.
- Helck, W., Otto, E. and Westendorf, W. 1980 *Lexikon der Ägyptologie*, Band III, Harrassowitz.
- Hassan, S. 1960 *Excavation at Giza IX*, Cairo.
- Jones, D. 2000 *An index of ancient Egyptian titles, epithets and phrases of the Old Kingdom*, 2 vols., British Archaeological Reports international series 866, Oxford.
- Kanawati, N. 1977 *The Egyptian administration in the Old Kingdom: evidence on its economic decline*, Warminster.
- Kanawati, N. 1980 *Governmental Reform in Old Kingdom Egypt*, Warminster.
- Kothay, K. A. 2008 "Phyles of Stone-Workers in the Phyle System of the Middle Kingdom", *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* Vol.134/2, pp.138-150.
- Krejčí, J., Verner, M. and Callender, V. G. 2008 *Abusir XII. Minor tombs in the Royal Necropolis I (The Mastabas of Nebtyemneferes and Nakhtsare, Pyramid Complex Lepsius no. 24 and Tomb Complex Lepsius no. 25)*, Prague.
- Krejčí, J., Kytnarová, K. A. and Odler, M. 2015 "Archaeological excavation of the mastaba of Queen Khentkaus III (tomb AC 30) in Abusir", *Prague Egyptological Studies* XV, Prague, pp.28-42.
- Labrousse, A. 1996 *L'architecture des pyramides à textes I - Saqqara Nord*, Mission archéologique de Saqqara 3, Cairo.
- Labrousse, A. 2012 *L'architecture des pyramides à textes II*, Mission archéologique de Saqqara 3, Cairo.

- Leclan, J. and Clerc, G. 1995 “Fouilles et travaux en Egypte et au Soudan, 1993-1994”, *Orientalia* 64, pp.225-355.
- Lehner, M. 1997 *The Complete Pyramids*, London.
- Möller, G. 1965 *Hieratische Paläographie. Die ägyptische Buchschrift in ihrer Entwicklung von der 5. Dynastie bis zur römischen Kaiserzeit*, Osnabrück.
- Moreno García, J. C. 1999 “Administration territoriale et organisation de l’espace en Égypte au troisième millénaire avant J.-C. (V): gs-pr”, *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 126, pp.116-131.
- Porter, B. and Moss, R. L. B. 1978 *Topographical bibliography of ancient Egyptian hieroglyphic texts, reliefs, and paintings*, III-1/2, Oxford.
- Ranke, H. 1935 *Die ägyptischen Personennamen*, Band I, Glückstad.
- Ranke, H. 1949 *Die ägyptischen Personennamen*, Band II, Glückstad.
- Ranke, H. 1977 *Die ägyptischen Personennamen*, Band III, Glückstad.
- Reisner, G.A. 1931 *Mycerinus, The Temples of the Third Pyramid at Giza*, Cambridge.
- Reisner, G.A. 1942 *Giza Necropolis I*, Cambridge.
- Roth, A.M. 1991 *Egyptian Phyles in the Old Kingdom, The Evolution of a System of Social Organization*, Studies in Ancient Oriental Civilization 48, Chicago.
- Strudwick, N. 1985 *The Administration of Egypt in the Old Kingdom, The Highest Titles and their Holders*, London.
- Verner, M. 1992 *Abusir II. Baugraffiti der Ptahschepses Mastaba*, Prague.
- Verner, M. 1995 *Abusir III. The Pyramid Complex of Khentkaus*, Prague.
- Verner, M. 2003 “The Abusir Pyramid Builder’s Crews”, in (eds.) Martin, K. and Pardey, E., *Es werde niedergelegt als Schriftstück. Festschrift für Hartwig Altenmüller, Studien zur altägyptischen Kultur*, Beiheft 9. Gebunden.
- Verner, M. et al. 2006 *Abusir IX. The Pyramid Complex of Raneferef, I: The Archaeology*, Prague.
- von Bissing, F. W. 1905 *Die Mastaba des Gem-ni-k3i*, Bd.1, Berlin.
- von Bissing, F. W. 1911 *Die Mastaba des Gem-ni-k3i*, Bd.2, Berlin.
- Vymazalová, H., Dobrev, V., Verner, M. 2011 *Old Hieratic Palaeography I. The Builders’ Inscriptions and Mason’s Marks from Saqqara and Abusir*, Prague.
- Vymazalová, H. and Coppens, F. 2013 “Two hieratic inscriptions from the tomb of Werkaure (Lepsius Pyramid No. XXIII) in Abusir”, in (eds.) Bárta, M. and Küllmer, H., *Diachronic trends in Ancient Egyptian History. Studies dedicated to the memory of Eva Pardey*, pp.123-135, Prague.
- Vymazarová, H. 2014 “The builders’ inscriptions and masons’ marks from the mastaba of Werkaure (AC26)”, in Krejčí, J. and Kytranarová, K. A. et al. *Mastaba of Werkaure I (Old Kingdom Strata)*, Abusir XXIV, pp.261-281, Prague.
- 近藤二郎 2005 「文字社会における「記号」の使用—古代エジプト新王国時代の職人と記号—」岡内三眞・菊池徹夫編『社会考古学の試み』同成社、pp.151-164.
- 高橋寿光、西坂朗子 2014 「古代エジプト、クフ王第2の船船坑の蓋石に記されたグラフィティについて」、日本オリエント学会第56回大会予稿集、日本オリエント学会、p.11.
- 高宮いづみ 2006 『古代エジプト 文明社会の形成』京都大学学術出版会.
- 西坂朗子、高橋寿光、黒河内宏昌、吉村作治 2011 「ギザ、クフ王第2の船の船坑上の壁体発掘調査概報」『エジプト学研究』第17号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-44.
- 山田綾乃 2011 「グラフィティから労働者組織—古王国時代のギザ台地を例とした—考察—」『溯航』第30号、早稲田大学大学院文学研究科考古談話会、pp.59-75.
- 山田綾乃 2013 『グラフィティからみた古代エジプト古王国時代の労働者組織』早稲田大学文学学術院提出修士論文（未刊行）.
- 山田綾乃 2014a 「エジプト古王国時代における建設労働者組織編成の変遷」『日本西アジア考古学会第19回大会予稿集』、日本西アジア考古学会、pp.48-52.

- 山田綾乃 2014b 「書体分析と分布分析によるベピ2世葬祭殿出土グラフィティの機能同定」『古代』第134号、早稲田大学考古学会、pp.66-81.
- 山田綾乃 in preparation “Some remarks on the Evolution of the workers organization of the pyramid construction in the Old Kingdom —through the examination of the so-called Mason’s mark—”, in (eds.) Bárta, M., Coppens, F. and Krejčí, J. *Abusir and Saqqara in the Year 2015*, Prague.
- 屋形禎亮 1973 「アブシール文書について」『オリエント』Vol.16-2、日本オリエント学会、pp.57-78.
- 屋形禎亮 1974 「アブシール文書研究 (一)」『東京教育大学文学部紀要』(96)、東京大学文学部、pp.1-41.
- 屋形禎亮 1975 「アブシール文書研究 (二)」『東京教育大学文学部紀要』(101)、東京大学文学部、pp.1-16.
- 吉村作治、中川武、近藤二郎、溝口明則、西本真一、柏木裕之 1996 「アブ・シール南・丘陵頂部建築遺構の「建造墨書」」『日本建築学会技術報告集』(2)、日本建築学会、pp.189-193.

注

- (1) 本稿における古王国時代とは2702/2657B.C.-2170/2120B.C. (von Beckerath 1997) 頃を指す。
- (2) 輪番制神官制度 (Phyle-sytem) についてはRoth1991を参照されたい。尚、この用語の和訳は屋形1973; 1974; 1975を参考にしている。ただし屋形による議論の一部、とりわけ輪番制神官制度がピラミッド建設の労働組織に期限を持つとの議論は、ロスの研究によってさらに先史時代に遡ると訂正されている。
- (3) Dobrev 1994; 1996; 1998における資料点数を筆者が合計した。
- (4) 本資料と同様に建造墨書が石材の一面に納まるように記されている資料が、アブ・シール南遺跡で知られている。この場合も石材がほぼ最終的な大きさに整形された後に建造墨書は記されたと認識されている (吉村他 1996: 192)。
- (5) 王の息子の称号を持つテティ・アंकは、*tz nhn?* という称号を併有している。*tz* の役職は司令官や管理者などが想定されており、第5王朝末以降の王の息子称号と似通った役職であるとされている (Dobrev 1996: 108)。
- (6) ケントカウエスという名の王妃については、2014年にチェコ・ブラハカレル大学エジプト学研究所の調査隊がケントカウエス3世となる人物のマスクバ墓を新たに発見した (Krejčí, Kytarová and Odler 2015)。本稿では、いずれもケントカウエス2世のものと考えられる。
- (7) ドブレフもインティという名前を建築家の愛称ではないかと考える際に、この人物を引き合いに出している (Dobrev 1996: 111)。
- (8) ArnoldによるShippingという工程に該当する (Arnold 1990: 20)。
- (9) セチュウの場合、その他多数のように「称号+人名」という語順ではなく、「人名+称号」の順で標記されている。労働者組織に関して考察する際に語順というものはしばしば重要となる。第4王朝メンカウラー王のピラミッド葬祭殿で発見された建造墨書は、労働者組織の名前が大規模+中規模+小規模の語順で記されている (Reisner 1931: 273-277: Plan XI-XII)。ロスはこの語順を階層性と見なし、大規模集団の下に中規模、小規模の集団が組織されているとの解釈を提示した (Roth 1991: 119-143)。仮に建造墨書の称号と名前の語順が「称号+人名」であることが正しく、ロスが言うように階層性とも結びついていた場合、セチュウはこの南の王の文書の書記官という称号の真の所有者ではなく、それに続く (または続いていたが失われてしまった) 人物が所有していた称号となる。さらにこの場合セチュウは宰相称号も所有しているため、宰相セチュウは南の王の文書の書記官の直属の上役という関係となる。しかしながら、「人名+称号」という語順は本資料の他に類例がなく、高官名と称号が登場して以来、語順から階層性を想起させるような例は1例もない。したがって現段階では単なる書き順の違いとの解釈が妥当であろう。
- (10) 早稲田大学エジプト学研究所・エジプト考古省合同調査プロジェクトであるクフ王第2の船遺跡の調査成果から、これらの要素を総合して石材の加工工程を復元するという研究が発表された (高橋他 2014)。これまでほとんど明らかにされていない古王国時代の採石から設置までを建造墨書と石材加工痕や記された石材面、顔料、その他複数の特徴を基に追証しようという新しい試みとして今後注目される。